KOSHU PRIDE
YAMANASHI・JAPAN

山梨県
Yamanashi Prefect.

TRADITIONAL CRAFTS OF YAMANASHI

時を超えて受け継がれる匠の技

承認番号 R2-163
（このマークがついている工芸品は経済産業大臣指定の伝統的工芸品です）

山梨県の風土と悠久の歴史のなかで生まれた国指定伝統的工芸品。匠の技と伝統に育まれた優れたものづくりを、脈々と受け継いでいます。

甲州水晶貴石細工

崇高な輝き。磨き上げられた造形美。

約1000年前、昇仙峡の奥地金峰山で水晶の原石が発見されたことが、甲府での水晶細工の起源です。江戸時代の天保年間、鉄板の上に金剛砂をまいて水晶を磨く方法を考案したのが水晶細工の始まりでした。水晶は硬度が高く、加工は非常に時間を要します。数珠や帯留め、根付けなど加工品の幅を広げ、産地として確立していきましたが、昭和50年代のドルショックを境に高度な技術を駆使した国内向けの美術品に昇華させ、今もなおその質を高めています。

甲州印伝

鹿革と漆が奏でる多彩な紋様

四方を山に囲まれた山梨県（甲州）は、古くから鹿革や漆を産出していたことから、甲州印伝が生まれ育つには格好の地であったとされ、江戸時代末期に、甲府城下を中心に生産が盛んになりました。十返舎一九著「東海道中膝栗毛」に記されているように、当時は各地で製造され、江戸の粋人たちに広く愛好されていましたが、現在、製法は甲州印伝のみに限られています。漆模様付けされた、柔らかく丈夫で軽い鹿の革で出来た袋物は、使い込むほど手に馴染み、愛着が増します。

甲州手彫印章

祈りの彫り、真心を伝える匠の技

山梨県の印章業は、御岳山系に良質で巨大な水晶鉱が発見・発掘されたことが起源です。江戸時代末期の「甲州買物独案内」には、甲府市内に御印版を扱う版木師の存在を示す記載があります。文字文化4000年の歴史の中、最も美しい篆書を中心に、印章の文字のデザインから、字割り、字入れ、粗彫、仕上げ等すべての工法を、昔ながらの道具と技法を用いて手作業で行っています。

山梨貴宝石

煌めきと温もりを持つ名士の技

水晶の原石の発見から水晶細工が盛んになり、しだいに水晶玉や水晶の置物に加え、ブローチ用の水晶のカットも始められました。研磨技術が大躍進を遂げ、アクセサリーなど様々なものがつくられるようになりました。熟練した職人の手により、原石を何通りもの工程を経て、輝きある貴宝石に仕上げています。国内最大の宝飾産地「山梨」の発展を支える原動力であり、産業集積地ならではの優れた工芸品です。

西島手漉和紙

時代のうねりの中で忘れられていた美しい紙

武田信玄の任により、「三椏（みつまた）」を主原料にした、平滑で光沢のある毛筆に適した紙が誕生しました。また、戦後には画仙紙を完成させ、全国に先駆けて販売し爆発的に広まり、西島和紙は発展を遂げました。現在でも、作者が望む渇筆やニジミが思いのままに表現できる手漉画仙紙や自然素材を取り入れた和紙の照明、ブライダル用紙など紙の個性を生かした新しい和紙の世界が広がります。

甲州雨畑硯

書家の心を魅了する漆黒の美

元禄3（1690）年、雨宮孫右衛門が身延山参詣の途中、富士川支流の早川河原にて黒一色の流石を拾い、これを硯にしたことが始まりとされています。以来、硯づくりの研究を重ね、将軍一橋公に献上したことからその名が広く知られるようになりました。中国硯にも勝る良石として古来からその石質が高く評価され、代々数多くの硯工を輩出し、現在までその高い品質・技術が伝承され、つくりつづけられています。

市川大門手漉和紙

千年の時を超えて育まれてきた伝統の紙

奈良時代末の記録に紙の産地として甲斐の名が記されています。市川三郷町市川大門には天台宗百坊といわれる程、多くの寺院があり、漉家があったといわれ、この漉家から漉出される紙が写経などに用いられていました。市川の和紙は武田家の御用紙として、その保護のもと発展し、江戸時代には幕府の御用紙として、保護されていました。原料は「楮（こうぞ）」「三椏（みつまた）」を使用し、美術紙、画仙紙等に適しています。

甲州武者のぼり／鯉のぼり

子どもの成長を願う勇敢な武者絵巻

天下泰平を目指す時代の翻った旗指物、吹流しが、江戸時代後半に端午の節句の祝いののぼりとして立てられるようになったのが、武者のぼりや鯉のぼりの起こりと伝えられています。富士川流域を中心に山梨県では染物が盛んで、江戸時代から変わらぬ技法で100％綿を利用し、下絵も当時からの物を使用しています。国内産の原料で染め上げる染物は、富士川流域の冷たい水で流され、独特の色合いに染められます。

富士勝山スズ竹細工

ほのかに香る繊細なスズ竹細工

スズ竹は、富士山二合目付近に自生しているしなやかで香りが良いところが特徴とされる竹です。細かい目で編んだザルは繊細でとてもしっかりしており、実用品としてばかりではなく、インテリアとしても好評を得ています。甲斐国志にスズ細工の記述があり、それ以前より富士山からスズ竹を取って、笊籬（いかき）を作っていたことがうかがえます。生活と身近な素材が融合して生まれた美術品にも通じる工芸品です。

甲州鬼瓦

人々の幸福を見守り、今蘇る伝統の美

南アルプス市加賀美地区の瓦づくりの起源は、この地域が御勅使河原扇状地の先端で、粒子の細かい粘土層が露出していたこと、良質の水が容易に得られたことなどが挙げられます。土練りやかけやぶり、磨き等の伝統技法で作られ、その表情は災いを追い払う気迫にあふれています。全て手作りのため、製品ごとに表情があり、鬼のもつ厳しさと能面のもつ優しさがミックスされた鬼面瓦として人気を博しています。

甲州大石紬織物

真心で織り上げた手作りの温かさ

延喜15（915）年「絹を朝廷に献上した」との一文が最も古い郡内地域の織物についての記述です。特徴は丈夫で軽く、柔らかく、そして絹特有のすべりの良さ、何よりも堅牢で絹織物と紬織物の両面の良さを併せ持つ、他の紬織と異なった風合いを持っています。江戸時代末期には租税として物納されたり、富士山を崇拝する富士講の人々や行商人の手によって広く売り出され、改良が重ねられ現在の大石紬に至っています。

親子だるま

親の願いをだるまに託して、夢・愛・希望

甲州だるまは約400年前、武田信玄の顔を模して作り始めたと伝えられています。一般のだるまとの相違点は、①白いだるまであること、②だるまの腹に子だるまがあること、③親の目は神棚に上げた時拝む人の目と合うように出来ていることなど。子どもの目は真ん中にあって、子どもの未来に、自分で目標を持ち真っ直ぐに歩んでほしいと思う親心といわれています。全国でも珍しい親が子どもを思い制作されただるまです。